

ベーシック・インカム下の人間の魂？

— オスカー・ワイルドと自由の系譜

河野真太郎

本論の目的は、自由について考えることである。私たちが直面している自由をめぐるジレンマについては拙論（河野）で論じたが、そのジレンマとは、「市場での自由」と「強い国家の下での（不）自由」が二律背反として現れてしまうことである。（新）自由主義体制下において、社会主義的な国家の統制は、自由を制限するものとしてしか想像されない。このイデオロギー的閉域から逃れるためには、自由の二律背反が生みだされた系譜をたどり、その二律背反を「学び捨てる」作業が必須である。それは同時に、忘れ去られた「自由」の系譜を思い出す作業ともなるだろう。ワイルドの「社会主義化の人間の魂」は、そのような作業の絶好の出発点である。

1. ベーシック・インカム下の人間の魂？

「社会主義下の人間の魂」の社会主義は、ベーシック・インカム（以下 BI、もしくは基礎所得）が実現した世界のように読める。共通点のひとつは私的所有の廃棄（もしくはその意味の変容）である。それはまた、労働の意味を変える。ワイルドは労働の観念をずらし何者も労働を強制されないという点に力点を移動させる。曰く「仕事という言葉で私が意味するのは、あらゆる種類の活動のことである」（1177）。BIには、人間の行うあらゆる活動は社会をささえるための「仕事」であり、賃金を支払われるべきだという考え方がある。ワイルドはこれを反転し、社会主義下では、賃労働とそれ以外の活動の区分が消失し、人は自由に労働＝活動を選ぶことができるとするのだ。第三は国家のあり方である。ワイルドは、国家は統治を最小限にし、「必要な財の、自発的な生産者と分配者になるべきだ」（1183）と述べる。BIは、従来の給付と異なり、資力調査ぬきで無条件に給付される。それが想定するのは、分配国家なのだ。最後の共通点は個人主義

である。BIは個人に対する給付であるという意味で、個人化・アトム化を押し進める究極の政策だともいえる。ワイルドは、社会主義と個人主義を結びつけるが、BIもまさに、社会主義的かつ個人主義的なものなのである。

BIは福祉論として行われる場合と、福祉国家も新自由主義も超えた、新たな共同性を要請するものとして考える場合に分かれている。この二つの見方のどちらをとるかによって、BIとワイルドとの共通性は、異なった様相を見せる。前者の場合に生ずる懸念は、それが新自由主義的であるという懸念だ。BIの論拠となるのは、生全体を不払い労働とみなす考え方である。ヴィルノのいうポストフォーディズムにおいて、私たちの生全体は、フレキシブルな労働の過程に組みこまれており、ワイルドが述べた労働とそれ以外の活動の区分の消去は、すでに実現している、それゆえに賃金を支払え、というロジックである。これは、一方では新自由主義状況の弁証法的な肯定であるし、もう一方では完全雇用のワークフェアとしての福祉国家体制を徹底したものとも考えられる。また、国家と個人との関係についても、福祉論の立場からすれば、BIは市場から個人を守る中間的なものを廃棄する新自由主義的政策ということになる。

このような二面性が生じるのは、「自由」や「個人」に対する私たちの考え方に、制約が加えられているからだ。逆に、BIを思考するためには、その制約をときほぐす作業が必要になる。その制約は、20世紀の経験によるものだ。いっぽうにはファシズムと、現存した社会主義の否定的な経験があり、もういっぽうには戦後福祉国家の経験がある、という構図の中で、私たちが「自由な個人」を考える際には、新自由主義的な、市場の中での個人の自由か、そうでなければ福祉国家的な、強い国家のもとでの個人の自由か、その二つしか考えられなくなっている。しかるに、ワイルドが社会主義下の個人主義を述べたときに、彼には20世紀の経験はなかった。つまり、私たちが自由な個人というものを考える際の制約は、そのままワイルドを読む際の制約になっているのではないか。本論の目標は、この制約のあり方を明らかにすることである。

2. リベラル・イングランドの奇妙な死

イギリスのリベラリズムの趨勢を考えるために、ひとつの歴史観を示したい。ジェド・エステイは、帝国の拡大から縮小へ、レッセ・フェールからポスト・レッセ・フェールへ、という流れを、モダニズム文学を軸に論じている。エステイの議論の核心は、30年代の、ナショナルな文化を自己民族誌的に再想像する試みが、戦後の福祉国家期の文化形式を準備したということである。

この議論に対する疑問は、ハイ・モダニズムと帝国およびレッセ・フェールは直結するのか、自由党によるニュー・リベラリズムはどうなるのか、つまり、エステイの述べる歴史のプロセスはもっと早く始まっていたのではないか、という疑問である。大田信良の著作は、ニュー・リベラリズムにおけるリベラリズムが、自由党の政党政治的敗北にもかかわらず生きのこりつづけたと主張する。言い換えれば、この本は、20世紀初頭に、「市場における自由」対「国家のもとの自由」という対立的区分がいかに生産されたかについての本である。

そのリベラリズムとはなにか。ワイルドが、私的所有を否定しつつ「個人主義」を主張できた理由は、同時代の私的所有と個人主義の言説を見ることで分かる。田中は、「自由と財産の保護同盟 (LPDL)」と、グラント・アレンの比較を行っている。アレンは1889年の論評「個人主義と社会主義」で、「保護同盟」はトーリーの既得権益を守ろうとする集団であり、そのレッセ・フェールの個人主義は、その実、土地所有の現状を隠べいするものだと批判している。対してアレンは、同じく国家の介入は否定しながらも、あらゆる人間が資源を平等に利用できるような、自由と個人主義の創造を訴える。そこで主張が、個人主義と社会主義の結合であり、ワイルドのエッセイはこの主張とほぼ同型なのだ。田中は、この二つの「個人主義」の立場の背景に、リベラリズムの、レッセ・フェールの／古典的リベラリズムから、80年代以降伸長するニュー・リベラリズムへの変容を見る。歴史的に勝利するのは後者であり、それが、エステイと大田の記述する歴史の前史をなしているのだ。

ワイルドはこの二つのリベラリズムのあいだの隘路を進もうとした。いっぽうでは古典的リベラリズムの私的所有を否定し、もういっぽうではニュー・リベラリズムがはらむ、権威主義的国家の可能性に警鐘をならす、というぐあいに。しかしやはり、ワイルドのいう社会主義を肯定型で想像するのは難しい。

私は、この困難を「実証的」に解決しようとするガイとは違う立場を、つまり、ワイルドを読むのが難しいのは、「国家か市場か」という自由についての考え方への制約のためであるという立場をとる。以下、この制約を解きほぐすための二つのアプローチを試みる。それらは、否定的系譜学（ある系譜の消去や制約の系譜学）と、肯定的系譜学（消去された系譜のポジティブな回復）と名づけるものだ。

3. 奴隷の国家

まずは肯定的系譜学から試みる。ワイルドは国家が“a voluntary manufacturer

and distributor of necessary commodities”であるべきだと述べ、また“All associations must be quite voluntary. It is only in voluntary associations that man is fine” (1177) とも述べる。この Voluntaryism や Associationism も、同時代に存在した言説と実践であった。アソシエーションについては、労働者クラブや成人教育など、国家にも市場にも依存しない中間団体が多く存在した（小関）。しかし、これらは、戦後福祉国家体制に頂点を見る、労働者階級与国家と労働過程への包摂の手段だったともいえる。ワイルドのいう分配国家やアソシエーションは、それとは異なるはずだ。

ワイルドの後継者として注目されるのは、ヒレア・ベロックである。ベロック『奴隷の国家』が現在持ちうる意味について、翻訳者の関曠野は「反資本主義的自由主義の古典といえる本書を読んで、自由主義本来のモラルからどれほど資本主義に対する仮借ない批判が出てくるか改めて思い知ることだろう」（Belloc 邦訳3頁）と述べる。本論の文脈では、いまやリベラリズムといえは新自由主義的な自由へと制約されており、かつてリベラリズムがもっていた資本主義批判のモメントは失われてしまったということだ。

ベロックは、資本主義は根本的に不安定であり、維持可能ではないと診断する。その解消のための方策としてベロックが示すのは、奴隷制、社会主義、財産である (97)。ベロックは奴隷制を、生産手段を握る少数者が、多数に合法的に労働を強制する国家と定義する (3)。ここで、ベロックは20世紀の全体主義や社会主義のことを言っているのではなく、戦後福祉国家を予言しているといったほうがより正確であろう。実証的に考えるなら、ここで想定されている敵は、自由党とニュー・リベラリズムだ。ベロックは、ニュー・リベラリズム的な福祉政策が、その実資本主義の不安定性を包摂するための政策であったと見抜き、結果として国家独占資本主義としての戦後福祉国家をあらかじめ批判したといえる。奴隷の国家への傾向はまさに、ワイルドが「権威主義的社会主義」に嗅ぎ取った傾向であった。

ベロックが示す第三の道、「財産 (property)」という言葉が意味するのは、生産手段である。ベロックは、生産手段をできるだけ均等に市民に分配する役割を、国家に求める。しかし、ワイルドと同様に、分配国家がどうやって実現可能なのかベロックは述べていない。ベロックのヴィジョンは、その後の歴史に埋もれていくことになる。

ワイルドからベロックにいたるラディカルなリベラリズムの系譜は、エステイが含意するように、死に絶えてしまったのか。ここで、話題を一気に現代にひき

つけつつ、それがいかに死に絶えたかを考える否定的系譜学の試みをしたい。

4. 二つのワイルド論

新自由主義状況の起源が求められる70年代に、響きあいながらも異質な二つのワイルド論が書かれた。まず、ライオネル・トリリングの『誠実とほんもの』(1971年)である。この本は、タイトルにある「ほんもの」希求の歴史、つまり疎外論の系譜学である。トリリングはワイルドの私的所有の廃棄の主張においては、「所有すること(having)」が「存在すること(being)」という本来の(authentic)様態からの疎外とみられているとする。トリリングは、これをマルクスの『経済学・哲学草稿』での疎外論に結びつけ、そのような疎外論は、当時広く共有された感情の構造であったことを示す。しかし、トリリングは authentic なものを神話として否定し去っているわけではない。この本は、疎外論の挫折を執拗に描くことで、それでもなお残る人間の自由の核を追求するものなのである。

最終章でトリリングは、精神分析が、authentic なものの追求を引き継いだと見る。ところが、フロイトは晩年の「文化とその不満」のなかで、自我と超自我の葛藤に苦しむ人間の苦しみの中に authentic なものを保存しようとする、非常に悲観的な結論を出している。それを乗り越えようとしたのが、ヘルベルト・マルクーゼだ。マルクーゼは人間性の変化を信じ、それも物質的状况の改善によって人間性は変化すると考えた。ところが、マルクーゼもまた、挫折した。ここで注目したいのは、挫折の原因である。トリリングは、『エロスの文明』の書かれた「1955年アメリカに見いだされる、道徳的拘束の弛緩」(164)が名指し、マルクーゼが憂慮したのは、「豊かで、寛容で、快樂志向の社会のほうが、伝統的な社会よりもより効率的かつ根深く個人を支配する」ことだったとする(Trilling 165)。戦後福祉国家における自由こそが、マルクーゼの躓きの石だったのだ。福祉国家下の自由とは、奴隷の自由でしかなかった。

このような疎外論の挫折の系譜のうちに置かれた際に、そこからは、ワイルドのリベラリズムがもっていた衝動は消去されるほかない。やはり福祉国家の成立に向かう、最初に確認した系譜へと、リベラリズムは限定されていくのだ。

対して、小野二郎は「ウィリアム・モリスと世紀末——社会主義者オスカア・ワイルド」において、社会主義の基礎となるべき「民衆の自発性」について、それを「抑圧されたエネルギーの一挙の解放」と考えるマルクーゼのテーゼを拒否する(47)。しかし、底の底まで支配的な文化形式に浸透されたかにみえる私た

ちの欲望の、さらに底への信念を、小野は表明する。二人は、ここまでは同じことを言っている。つまり、トリリングはこの「底の底の底」への信念をもっているがゆえに、それを否定的な形ではあれ跡付けたのだ。小野は逆に、疎外が徹底的に進むからこそ、「自由を求める魂」の存在が明らかになると考えたのである。

小野は「社会主義下の人間の魂」を、(ベンヤミンをもじって)「大衆の芸術化」と定義する(51)。小野はここから、ラスキンからモリスへの系譜に目を移し、二人は、単なる有機体論者ではなく、アール・ヌーヴォーにおける装飾と全体の関係と同じく、装飾的な細部の連合による全体性を思考していたとする(57)。そして小野二郎は、この「連合」こそが社会主義の基本的感覚だと述べている。小野の議論の後半にワイルドは登場しないが、ここで、先ほど注意を喚起した、voluntary associations が意識されていないはずはない。

私はBIが個人化・モノ化を進めるものだと述べたが、同時に私たちの個人の観念は歴史的な制約を加えられていることを論じた。だとすれば、BIが前提とし実現する個人主義は、現在の競争的個人主義とは根本的に異質なものであるべきだ。最後に私は、ここで前景化した voluntary associations という個人と共同体のあり方に可能性を見いだしたい。関は、BIが実現されるには、それに対応する政治体制がいまだ存在していない、そして、現在想像しうるのは、独裁者による専制か、それとも完全なデモクラシーのどちらかだと述べている。前者は論外として、後者が実現されるには、この、モノたちが作りあげる(非)有機体的な全体性が必要であり、それは、レイモンド・ウィリアムズの言葉を借りるなら、長い革命のプロセスによって今すでに実現されつつあるのだ。大貫隆史がウィリアムズの『モダン・トラジディ』について述べているように、そのプロセスはさまざまな制約が課されるからこそ発動するものであった。小野二郎が「底の底」までの疎外を強調するのは、まさにそのような精神だったと考えられる。疎外が進むからこそ明らかになる、自由を希求する精神。「自発的アソシエーション」はそのような精神のユートピアである。それを、ワイルドを学び直すことによって、理解できるかもしれない。

主要参考文献

- Belloc, Hilaire. *The Servile State*. Edinburgh: T. N. Foulis, 1912. [『奴隷の国家』関曠野訳、太田出版、2000年。]
 Esty, Jed. *A Shrinking Island: Modernism and National Culture in England*. Princeton: Princeton

UP, 2004.

Guy, Josephine M. "The Soul of Man under Socialism: A (Con)Textual History." *Wilde Writings: Contextual Conditions*. Ed. Joseph Bristow. Toronto: U of Toronto P, 2003. 59-85.

Tanaka, Yusuke. "The Premature Burial of Liberalism: Inadequate Fetishists in Oscar Wilde's The Picture of Dorian Gray." *Hitotsubashi Review of Arts and Sciences* 4 (2010): 243-65.

Trilling, Lionel. *Sincerity and Authenticity*. Cambridge, Mass.: Harvard UP, 1971.

Wilde, Oscar, "The Soul of Man under Socialism." *The Complete Works of Oscar Wilde*. London: Collins, 2003. 1174-97.

ヴィルノ、パオロ『マルチチュードの文法——現代的な生活形式を分析するために』広瀬純訳、月曜社、2004年。

大田信良『帝国の文化とリベラル・イングランド——戦間期イギリスのモダニティ』慶応義塾大学出版会、2010年。

大貫隆史「演劇的近代(2)——Modern Tragedyと制約、全体性、そして不可避性の問題」『レイモンド・ウィリアムズ研究』第1号(2009年10月):113-135頁。

小野二郎「ウィリアム・モリスと世紀末——社会主義者オスカー・ワイルド」『装飾芸術—ウィリアム・モリスとその周辺』青土社、1979年、43-58頁。

河野真太郎「自由」『Web 英語青年』157巻1号(2011年4月):28-40頁。

小関隆編『世紀転換期のイギリスのらびと——アソシエーションとシティズンシップ』人文書院、2000年。

関曠野「ベーシック・インカムをめぐる本当に困難なこと」『現代思想』vol. 38-8 (June 2010):210-8頁。

森山亮『ベーシック・インカム入門』光文社、2009年。

深淵のユートピア ——ワイルドとモダニズムにおける批評言説

秦 邦 生

1. 批評／批判とはなにか？

オスカー・ワイルドにおける「批評／批判」とは、いかなるものだろうか。『キーワード辞典』(1976年)において、レイモンド・ウィリアムズは *criticism* という言葉の語義の変遷についておおよそ次のように述べている。この言葉の最初期の主要な意味は *fault-finding*、つまり「非難」や「あら探し」という意味だったが、それに代わって17世紀後半以降、*judgement*、特に文学や芸術に関する判断や裁断の意味が徐々に台頭し一般化して「趣味」や「教養」との連想が成立した。だが、ウィリアムズはこの語義の変遷を問題視し、*criticism* (批評) が *judgment* (判断) に還元されてしまうと、文学や芸術を享受する消費者を前提すると同時に、特定の趣味や教養を備えた「批評家」のみを権威化・特権化することに結びつくと指摘している。これに対してウィリアムズが提起する批評観は、「その全体的状況や文脈と活発で複雑な関係を切り結ぶ一定の実践」(Williams 86) というものである。すなわち抽象的裁断ではなく、具体的実践としての批評／批判。ワイルド、ひいてはモダニズムに、そうした実践としての批評を見出すことは可能なのだろうか。

2. モダニズムのワイルド

以上の問いを念頭に、まず盛期モダニズムとの関係でワイルドの批評を見てゆこう。1914年、「渦巻派」^{ヴォーティシズム} という前衛芸術運動を準備していたウィンダム・ルイスは、ライヴアルのイタリア未来派を揶揄する「自動車主義」という短文を発表している。ここでルイスは、未来派が喧伝した「機械の美学」を、すでに世紀末のワイルドが先駆けていたと述べている(“Automobilism” 34)。未来派は1909年の記念的な「創設マニフェスト」において、当時のテクノロジー的革新のスピー